

オーガの里で刀を打ち 続ける鍛治師

あ S づいぐいあ D

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千子村正に憧れたTSオリ主の話。

TSオリ主「私は刀を作るために生まれた。

すべては、あの草薙之剣を再現するために
オーガの面々「ダメだこいつ、早く取り押さえろ！」

TSオリ主「頼むつ！金槌を、せめて鉄を握らせてくれえええええ！」

目 次

剣を作るためだけに |

依頼を全うするためだけに |

笑顔を守るためだけに |

この平和を享受するためだけに |

24 15 8 1

剣を作るためだけに

火花が散る。

溶岩を彷彿とさせる赤と黒が混ざつた獲物に俺は愛用の金槌を振り下ろす。再度、悲鳴を上げて火花を飛ばす獲物。

その欠片が頬にかかるが、そんなものはどうの昔に慣れた。

何千回、何万回と振つてきていた俺からすれば、ちやちな火花程度では蚊に刺されたぐらいにしか感じない。

だんだんと獲物も抵抗する力がなくなってきたのか、俺が想像している形へとその身を変形させていく。

角度、強度、温度。

それら全てに細心の注意を向けつつも、それでも俺は全力で金槌を何度も振るう。

そして、頬を流れる大量の汗を首に巻いた布で拭い “それ” が完成したことを確認すると、燃え盛る炎を傍に置いていた水釜で消した。

「…………いい、刀だ」

思わず、見惚れてしまう刀身の輝き。

窓から差し込む日の光を全身に浴びて煌めく刀は、間違いなく俺の最高傑作であり渾身の一振りだった。

だが、それゆえに痛感してしまう。

こんなものでは俺の目指すあの刀には辿り着けない、と。

小屋を出た俺は里の外れにある丘へと向かう。

木々の影に隠れた、俺のお気に入りの場所だ。

そこに着くのにさほど時間はかかるなかつた。

ゆるやかな傾斜が続く、少し横に長い丘。

そこだけくり抜いたように草木は生えておらず、剥き出しの大地がその存在を露わにしていた。

その丘を登つた俺は適当な場所に刀を突き刺し、一礼した後にその場を去る。

こんな鈍で満足しては駄目だと、不甲斐ない自分への怒りを込めた一刺しの感触は、いつになつても不快なものだつた。

そうして、見習い鍛治師としての生活は今日も終わりを告げた。

オーガの里。

大きく切り立つた岩々を天然の要塞として活用し、二重に建てられた白亜の塀が里を囲む。

その中には森の上位種である大鬼族の戦士達が住まい、日々その肉体を鍛え続けていた里。

その中には森の上位種である大鬼族オーラガの戦士達が住まい、日々その肉体を鍛え続けてい
る里。

はつきり言つてこれを打ち破れる者などいるのか、そもそもそんなこと考えるバカが
いるのかと疑うほどの無敵っぷりを誇る我が第二の故郷。

戦争の“せ”の字もない平和な里は、今日も平穏な一日を享受している。

そんなオーラの里を、日照つた身体を冷やそうと夜風に当たつていた俺は改めて好意的に感じる。

弱きを助け、強きを挫く。

その言葉を表現したように里の者全員が優しいこの場所は、かつて知つたるコンクリートジヤングルとは違ひ不思議な温かみがある。

疲れ切った俺が骨を埋めてしまうのも仕方がないと言えた。

「つてうおおおおおおおおおおおおおお!おま、服!ふくうううー。」

そういうやあのクソ上司不倫バレたのかな、いやバレていってくれと心の中で悪態を吐い

ていると外野がうるさいことに気づく。

「?……なんだ、若か」

振り返つてみてみれば、赤い髪をした美青年が一人喚いていた。
というか、この里の長の息子……若だつた。

「若か、じやねえ！ 服着ろつて言つてんだアホオ！」

顔を真つ赤にして叫ぶ彼の姿は必死そのもの。

はて、何故彼はそんなにも必死なのだろうか……？

なんて天然ぶるわけでもなく、原因は俺の姿にある。

下半身は無印の道着、上半身は
首からかけたタオル一枚だつ
た。

刀の鍊成の際は汗がめつさ流れるので、俺はいつも服を脱ぎ捨てて（流石に下半身は
脱いでいいが）金槌を振るようにしている。

そして、熱くなつた身体を冷やすために又もや服を着ていなかつた。

男だつたころの感覚が今も残つてゐるらしい。

胸には存在感を主張するアレがあるというのに、まだ女としての自覚が足りないよう
だ。

確かに、これは思春期真つ盛りである若には刺激が強すぎるかもしねりない。

でも大事なところはタオルに隠れて見えないから、俺は良いと思うけどな。

公然わいせつ罪なんてこの世界にはありやしないだろうし。

しかし、そんな理屈は若には通用しなかつたようだ。

「ほ、ほら！・コレやるから早く着なさい！」

目を片手で隠し、もう片方の手で自分が先ほどまで着ていた服を差し出してきた。心なしか口調が可笑しくなつていたのは、しかたのないことだろう。

元男としてそれは同感できるものであつたから。

顔をタコのように真つ赤に染める今の若からは想像もつかないだろうけど、彼はこう見えてなかなかにやる男である。

剣の腕じや師匠に勝ててないらしいが、それでもこの里で十本指には入るであろう実力者。

加えて炎系統の妖術を心得えており、まさに屈強な大鬼族オーラガの戦士といったところか。

鍛冶師である俺とは戦う機会こそないが、同年代なことと刀を打つ俺と刀を扱う若といふ関係なおかげか、そこそこ仲良くさせてもらつている。

まあ、それでも今世も含めれば三十を超える俺からすれば若などまだまだ青いんだけどね。

若の服を着た俺は、恥ずかしそうに目を逸らし続ける若に一応感謝を伝える。

「若、臭いです」

「そりやさつきまで師匠の稽古を受けていたからな……今度からはちゃんと着ろよな?
心臓が持たん」

それは無理だな。

最早ルー・ティーンと化しているし、やめられないだろう。

「それで、今日も刀を打つてたのか」

「はい。まあ納得のいくものは作れませんでしたけど」

「俺からすりや結構な一品だと思うんだが……」

いや、あんなガラクタなど俺の目指すものとは程遠い。

ただ切れ味のいい刀は山のようにある。

だが俺は、この世界に唯一にして絶対なる刀を、いつかこの手で作りたいのだ。
それにどれだけ時間がかかるても構わない。

例え、この一生を捧げて得られるのであるならば、俺は喜んで捧げる。

「若は、どうでしたか?」

「聞くな聞くな。滅多打ちにされて終わりだよ」

そんなことは若の身体に広がる癌で分かるのだが、やはりそうだったらしい。

俺は剣の修行など何の楽しみがあるのか分からんが、それと同じように彼も鍛冶師としての遣り甲斐など分かるわけでもないだろう。共通しているのは、目指している理想像が“最強”という点だけだがそれだけでも何となく分かるつちゃ分かる。

「ま、とにかく頑張るしかないだろ」

「そうですね。やり方は違いけれど、目指すモノは同じです。気張っていきましょう」

「おう！」

一向に進歩をみせない自身への怒りと悔しさを飲み込むように、お互に拳を合わせ、少しだけ笑い合った。

依頼を全うするためだけに

「これは凄いな」

「はあ、私からすれば普段通りですけど」

あれから何故かついてきた若を追い払うわけにもいかず、俺の仕事場である小屋への侵入を許してしまっていた。

別に入られて困るというわけではないが、私生活を覗かれているようでなんだかむづかしい。

「あそこにあるのは全部刀か？未完成なものは見て分かるが、どう見ても成功作のが混じっている気が……いや深くは言及しないが」
む、そこに目をつけるとは若も中々にやりますな。

色々と血迷つていた時期の刀や未熟だつた頃の刀も捨ててある。中にはかなりの年代物の刀もあるし、すきま時間には興味本位で漁つたりしている。

ときどき面白い発見があるからやめられないんだよねー。

「おつ？」

俺の許可も得ずに勝手にゴミの山を漁り出した若は、ある一振りの刀を手に取って疑問の声を上げる。

「…………なんだコレ？なんで刀身に刀身がブツ刺さってるんだ？」

アレは、確か数年前に作つたものだな。

某鬼を滅ぼす漫画に登場する六つの目の鬼が所有する、気持ち悪い刀を再現しようと頑張つてみたんだが……。

当然の如く失敗。

刀身をくつつける際に溶かした接着部分が爆発してえらい目に遭つた。

とはいって、過去の失敗はもうしないのでもう一度作ろうと思えば成功するだろうが。

「有り得ない軌道で敵を襲う武器を作ろうと思つたんですけどね、当時の私には難しかつたようです」

「そもそも鞘に収まらないと思うんだがな」

うるさい若。

俺は刀を作る専門家であつて、鞘を作る専門家ではないのだ。文句を言うのならば俺に言わないと鞘職人に言つて欲しい。

それからも、片腕に仕込ませておく刀だつたり口に咥えて扱う刀の話をしたりと、いい具合に盛り上がつた。

何故か若からの視線が恐ろしいものを見る目に変わっていたのだが、自分がヤバいことなどどうに理解できているので気にならない。

……俺が刀を手に取つただけで無言で半歩下がるのは心にくるものがあつたが。久しぶりに他人と話しことに多少の満足感を覚えていると、若が顎に手を当てて言つてきた。

「なあ、頼みたいことがあるんだが」

「なんですか？結婚ならお断りですが」

「いや、それは俺もちよつと……」

真顔で返すな、殺すぞ。

「そんなことはどうでもよくてだな。頼みつてのは俺の刀を作つて欲しいんだ、最近折れちまつたし」

「はあ、私は構いませんが。ですが何故私に？もつと腕の良い鍛冶師はいるでしよう」「……いや、お前がいいんだ。できれば赤い刀身にしてくれると嬉しい。それと柄の部分は朱色の炎で」

なるほど。

貴様まさかあのゴミ山に感化されたな？

あそこには前世の夢だつた中二臭い武器がゴロゴロ転がつていてる。

たぶんだが、煉獄さんの刀を見たんだろうね。

男たるものその考えは理解できなくもないが、俺に頼むまで好きになつたのかよ。

「分かりました。ですが、柄の部分は素人なのでお粗末になつてしまふでしようから、他の鍛冶師に頼んでもいいですか？」

「おう、全部お前に任せる」

ニカツと笑う若是嬉しそうだが、対照的に俺は全力で肩を落としていた。

いや、俺は嫌なわけではない。

ただ、人生初任務がこんな若造からの依頼とは思つていなかつただけなのだ。

初めては長とか師匠から任されると思つていたのに……まあ早いことに越したことはない、か。

「納品日時はそつちの好きな具合でいいぞ。数年は余裕で待てるから」

「数年はかかるないです私のこと舐めてるんですか。……納品日時は、そうですね。今日から丁度一ヶ月後、貴方の家まで送り届けさせてもらうことにします」

彼の有名な「村正」を作つた千子村正も言つていた。

例え依頼人が悪だとしても、鍛冶師は鍛冶師のやることを全うするだけだと。

若のような戦場に出たことのない子供でも、これは立派な依頼。

俺は全力を尽くして、若の期待に応えなければならぬ義務がある。

そう思うと、なんだか胸が熱くなってきた。

これが恋……！トクウン……なんてのはなく。

ただ、前世の仕事マンだった頃の感情が沸き上がりつてきただけである。

「あ、もしかしたら俺の仲間もお前に依頼しにくるかもな」

「は？」

「いやなに。俺の修行仲間のアイツらにもお前のことを以前紹介したことがあつたろう？」

覚えてないのか？みたいな顔されても、記憶にないものは思い出せない。

紹介されたというのなら会っているはずだが……。

「ほら、アイツらだよ。紫髪の女と、青髪の男。結構仲良さげに喋つてたじやねえか」

青髪……紫髪……ねえ。

あつ。

……思い、出した。

確か、あれは数ヶ月前のこと。
俺

あまりにも閉鎖的な娘を心配してか、俺の親父が若たちの所に連れて行つたことが

あつた。

残念ながら、そこで彼らとは仲良くなることは出来なかつたけどね。

刀の鍊成の邪魔をされ不機嫌MAXだつた俺と、師匠にボコされていて同じく不機嫌MAXだつた二人の間で喧嘩が起きてしまつたのだ。

師匠と親父はたぶん子供同士の喧嘩だと甘く見ていたんだろうけど、俺からすれば初めての戦闘である。

緊張と高揚で不思議な気分になりつつも、あたふたと焦つていた若の手から木刀を奪い取り、二人相手に殴りかかつた。

今でもあれは大人げなかつたと思つて いる。

三十路の俺がするようなことじやないよなホント……。

しかし、当時の俺からすれば知つちやこつたない。

鍊成された刀を何度も素振つていたのが功をなしたのか、二人を相手取つて勝つてしまつたのだ。

流石に子供相手に（俺も身体能力的には子供だが）直接攻撃をすることはなく、木刀を破壊——つまり武器破壊することによつて事なしを得た。

事なしを得たのだが、それのせいで彼らとは確執があるのだ。

……あのときの俺はマジでどうかしてたよな。

我ながらそう思うわ。

「だからさ、そんときはよろしく頼むぜ？」

馴れ馴れしく肩を叩いてくる若。

それを手で払いいつも俺は苦情を出す。

「そうですかね。私と彼らの間にはそんな気安い関係はないと思いますが
「そうか？この前なんてアイツらお前のこと話してたぞ？今度会つたら喜んで歓迎して
やろうって」

「絶対嬉しくない歓迎だと思うのは私だけなのでしようか……」

そう呟いて俺は目頭を指で押さえる。

はあ、こんな勘違い野郎が次期里長で大丈夫なのだろうか……。

笑顔を守るためだけに

何度も、何度も刀を振り下ろす。

振り下ろしては碎け、振り下ろしては折れる。

なんて脆い刀だろうか、こんな鈍が俺の作品とは。自然と笑いが零れてきた。

“ソレ”を足で踏み、見下ろしていた俺は自嘲するように口端を上げる。
いいだろう、こうなつたらとことんやり合おうじやないか。

誰に向けたかも分からぬ言葉を呴きながら、使いものにならない刀を放り投げ俺は銀色に鈍く光る刀を手に取つた。

そして、また振り下ろす。

甲高い金属音をたてながら刀は碎け散る。

何時間もかけて打つた俺の刀は、“ソレ”を破壊するどころか掠り傷さえ作ることが出来なかつた。

そのことに、俺は怒りにも似た悔しさを覚える。

それは不甲斐ない刀への感情ではない。

遙か昔、俺の先祖が打つたとされる“ソレ”に対しての感情であつた。何故だ？ 何故この刀は折れない？

製法は同じなのに、一体何が違うというんだ？ 素材の問題か？ いいや、違う。

だつた。

感触も、臭いも、切れ味も、味も、全て俺が知つてゐるどこにでもあるような鉄鋼石作つた者の技力の差か。

「くそつ！」

分かつてゐるとも。

分かつてゐる。

これが何の意味もない、ただの八つ当たりであることを。

それでも俺は、ただ我武者羅に刀を叩きつけることしかできなかつた。

そして、その身を輝かせる“ソレ”に腸が煮えくり返る。

怒りが俺の脳を支配する。

消えろ。

壊れろ。

折れる。

何度念じても、何度刀を振るつても、現実は変わらない。

気づけば俺は、息を喘ぐように荒く吐いて、水たまりの上で膝を付いていた。視界は汗と疲れで霞み、指先は痙攣するように震えている。

この症状を俺は知っている。

脱水症状、水分が欠如しているときに起きる身体の危険反応。

前世で経験したからこそ分かる、死ぬ直前のあの気持ち悪い感じ。

早く、何か飲み物で水分を取らなければ。

そうじやなきや俺は死ぬ。

水分不足で死ぬとか、マジで笑えないから。

途方もない疲れで、冷静になつた俺は急いで立ち上がるうとして

カクン、と転げ落ちる。

意識が覚醒したときにはもう、俺は地べたに倒れていた。

マズい。

腕に力が入らない。肺に酸素が足りない。

視界が、真っ黒に染まっていく。

これは、かなりマズい。

途切れかける意識を繋ぎ止めようと必死に歯を食いしばるが、それもやがて限界に近くなつていく。

クソつたれ――

消えゆく視界の中、最後に思つたのは、思い通りにならないこの世界への暴言だつた。

「また無茶をしたんですか？」

「ははは……申し訳ないです。姫様」

脳震盪を起こしていた頭に、包帯を巻いてくれた姫様に俺は頭を軽く下げる。
倒れたときに頭を強く打つたみたいで、しばらくの間は安静にしておくとのこと。

本当に、申し訳ない。

あれから俺は、姫様のいる医務室に運ばれたようだ。
いやはやラツキー。

幸運の女神が俺についているのであろう。
……まあ仮にも大鬼族の一員なんだから、脱水症状如きでくたばるとは思つていなかつたが。

それくらいなら何度も経験あるし。

「刀の鍛錬もいいですが、せめて加減を覚えて欲しいのです……。これで何度目ですか?ここに連れてこられたのは」

「うつ……それを言われると辛いですね」

「分かっているのなら自重してください。お兄様と違つて貴方は女の子なんですから」

そう言いながらも傷のある箇所を包帯で巻いてくれるのは、やはり隠せきれない優しさというもののか。

雪を連想させる真っ白な肌に汗を浮かべせて美少女が奉仕する光景は何度見たつて眼福である。

こんなにも可愛らしいのに、妖術の扱いに長けているとか鬼に金棒だよね。

「そういえば、姫様は妖術に長けているんでしたっけ？」

「ええまあ。人並にですが」

「人並でも構いません。少し、ほんの少しお願いがあるのですが……」

手を合わせておねだりポーズをとると、姫様はその笑顔をもつと華やかにする。

「あらあら！ 何でも言つてちょうだい、私にできることなら何でもするから！」

曇り一つない、屈託の笑顔。

その笑顔で若様を連想してしまつたことが悔しいが、そんなことはどうでもいい。兄弟なんだからそら似るだろうし。

これは俺の勝手なイメージだが、姫様は、簡単に言うと箱入り娘である。

ガラス細工を扱うように丁寧に保護されていて、外に出て遊ぶことも少ないと聞く。里長の娘であるから願いは大抵叶うだろうし、何不自由ない生活を送っているのだろう。

だが、それゆえに他人から頼られることに過剰に喜ぶ。

こんな自分でも、誰かのためになれるんだと思うのだろう。

その気持ち、厳しい現代社会を生き抜いた俺も同感できるところがある。

誰かに頼られるのは確かにめんどくさいことだが、その反面心の奥底ではホワホワとした気持ちになるのだ。

だから、姫様は頼られたら断れない。

「では遠慮なく。そのお願いとはですね、姫様の妖術で鉄鉱石の純度を上げて――

――

「嫌です」

びしやりと拒絶する姫様。

なんでや、さつきまでチヨロ姫だつたのに。

「いやですね、姫様。これは私だけの問題ではなく」

「いいえ、貴方の問題です。ここまで貴方を連れてきたのは誰か知っていますか？……誰であろう、私のお兄様です」

「……う

しまった、と心の中で毒吐く。

その件については毎度毎度お世話になつてるので、俺は何も言い返せない。

「貴方を連れて帰つてきたお兄様の顔を想像したことがありますか？小屋で倒れている貴方を発見したときのお兄様の気持ちを想像したことがありますか？」

「……う

「本当は楽しい話をしたいのに、傷だらけでいつもやつてくる貴方を迎える私の身にもなつてください」

「…………すみませんでした、もうしません」

姫様の連続口撃に、俺はただ謝ることしかできなかつた。

そうだよな、若様だつて、姫様だつて、俺のことを大切に思つてるんだ。
俺はもし自分が死んでしまつたとしても「しゃーない」としか思わないが、大事な人が死ぬのは絶対に嫌だ。

ましてや、その人が傷だらけで帰つてきたなんて、発狂するだろう。

それなのに、俺は……。

「…………ですが、ボロボロになつて帰つてくるのはお兄様も同じ。そこは大目に見てあげましょう。今度からは絶対に怪我はしないと約束するならば、ですが」「安心してください怪我なんてしませんボロボロにもなりません」

「でも、ボロボロにならないと私の部屋には来ないんですよね……それはそれで悲しくなります」

「いいえ行きます一か月に一回は「一か月?」……一週間に一回は、少なくとも」

「ふふつ、貴方はすぐ調子に乗るんだから。それで、私の妖術で助けて欲しいことがあるんですね? それについて聞かせてくださいますでしようか」「ははー! 喜んでお話しさせていただきます!」

駄目だ、この姫様に勝てる未来が見えない。

この先、何度姫様に遊ばれるんだろうなと思いながら、しかし、心のどこかでそのことに喜びを感じながら。

俺は、数時間にも及ぶ鉄鉱石の純度向上方法についてのプレゼンを行つたのであつた。

この平和を享受するためだけに

今思えば、コイツが元凶だったと理解できる。

それほどまでに、純粹な悪。

当時の俺はその凶悪さに、気づくことが出来ていなかつた。

何度、過去に戻りたいと思つたことか。

何故自分が生きているんだろうと疑問に暮れたことか。

叶うことならば、もう一度

「お前に”名”を授けてやろう」

シルクハットにモーニング、手には杖を携えた小柄な男。

どこか上から目線の言動は、どこから湧いてくる自信故のことだろうか。ゲルミュツドといったその男は、偉そうに俺にそう言つてきた。
いや勝手に小屋に入つて来て第一声がそれかよ……。

NOKの集金かつての。

そもそも、鍛治師の仕事場は神聖なものである。

極限の集中力を保つために、雜音どころか外との世界から隔絶されているのだ。
そうした環境を創り出すためにわざわざ里の離れに建ててもらつたつてのに。

内心で愚痴る俺だつたが、それは表に出さない。

現代社会で鍛えられた表情筋は伊達ではないのさ。

こういうのは当たり障りない、妥当な返事をするのが最適解である。

「いりません。誰とも知れない輩から、ものを貰つてはいけないと父から教えられていましたので」

その言葉に、ゲルミュツドはチッと舌打ちをする。

「くそつ……どいつもこいつも俺様の名づけを拒みやがつて……」

……どうやら俺以外の里の者にも声をかけていたようだ。

彼の反応と言動から見るに結果はよくなかつたらしい。

そりやそりや、見本みたいな不審者の恰好をしている男がいたらそりや警戒するだろ
うさ。

俺が一人で納得していると、ゲルミュツドはそれが気にくわなかつたようで杖をこちらに向けてきた。

「まあいい。丁度俺様もヒマをしていたところだ。その女、怪我をしたくなれば抵抗せずに言う通りにしろ」

「はあ」

「チツ……気にくわない顔だ。しかしそれが歪むどころも見たいまであるな」

「は？」

「みてくれだけは悪くないからな、俺様直々のおもちゃにしてやろう」

なんだコイツ。

息を荒くして近づいてきやがつた。

手をワキワキしてて気持ち悪いな。

とてつもなく殴りたい気持ちで一杯なんだが。

そこで俺はふと、あることに気づく。

よく考えれば、小屋の中に男と女（元男）が二人きり。

ナニも起きないわけがなく……。

ぶつ殺すぞ？

俺は男になど興味はない。

普通に女の子が好きだ、そんなアブノーマルな趣味は持ち合わせていないのだ。
とはいえる、ここで手を出してはいけない。

日本で正当防衛という言葉があるように、相手が手を出していない限りその防衛は正当だとは言えなくなる。
それに、このゲ……なんだつけコイツ、ゲロみたいな名前だったのは覚えてるんだけどな。

全然興味がないから忘れちまつたよ。

俺が何も言い返さないことをいいように、ゲロは俺の服に手をかけ――――――

「え」
はーい確信犯。

逆に俺がゲロの服を掴み、勢いをつけて背負い投げる。

腐つても森の上位種であるオーガの一人、その腕力が並みの人間に負けるわけがない、やすやすとゲロを投げることに成功した。

壁に強く背中を打つたゲロは、ぎゅえっと奇妙な声を上げて倒れる。
やはりコイツもいな。

なんかこう……あくまで直感だがよくない気配がする。

上位魔人だがなんだか知りませんけど、さつさと出てつてください。仕事の邪魔です」
邪魔？まさか……この俺様が？と喚き始めるゲロ。

貴方以外にいませんよ、なんて火に油を注ぐことはしない。

それを無視して、俺は鍊成の準備を始める。

この前若様から依頼が入ったからな、その準備を始めなければならないのだ。
依頼人はともかく初仕事なのでたっぷり時間を持つた上で挑戦したい。
だからゲロとかいう上位魔人さんにかまつてはいるヒマはないのだ。

火打ち石を使って、窯の中に火を起こす。

おー燃える燃える

「ちつ！お、覚えていろよな！お前達全員ブツ殺してやる！」

いつのまに回復したのか、そう言つて小屋を去つていくゲロ。

一体何がしたかつたんだか……物騒なこと言つてたけど、どうせ口だけだろ。見る感じ小物だつたし。

ゲロの背中を見ることなく、俺は鍊成へと意識を向けた。

それから数分経つた頃には、既にゲロのことなど頭の内から消えていた――

数時間後。

姫様に手伝つてもらつた妖術の件だが、硬質化や不純物の排除に使えそうとのことだつた。

本来ならばもつとバリエーションがあるとかないだとか、如何せん姫様も修行中なので覚えている妖術ではこれぐらいが限界らしい。

まあそれくらいが妥協点かなと俺も思うので不満はない。

むしろやる気がUPしたな。

こんなかわいい子も頑張つてるんだ！俺もちゃんとやらないと！みたいな。

「漆塗りの際に炎のエフェクトを表現したいのですが」

「えふえくとつていうのはよく分かんけど、炎を表現したいならこうやつて何層にも塗り直すのが良いべ」

俺の質問に、親父が実践してくれる。

なるほど。

よく分からん。

漆塗り……いわゆる刀の黒い部分にあたる話だ。

ただ塗るのなら俺だって出来るが、炎を表現しようとして行き詰っていた。

そこで登場するのは我が家の大黒柱、名もなき親父。

オーラの里の鍊成部門筆頭といつても過言ではない実力で、その刀を目当てに他の国から商人がくるほどらしい。

今世での俺のファザーにあたる。

俺の派手な容姿とは違つて THE 仕事人！ つてな感じの見た目。

地味だが、そのかわり鍛治師とはこうあるべきという思いを抱かせる。

貫禄つていうのかね、少なくとも俺よりは何倍も鍊成は上手い。

だからこうやって師事を請いているんだけど、横から真剣を見てても何やつてんのか
分からん。

速度もしかることながら、その mm 単位の正確無比なコントロール。

はつきり言つて神、俺との実力差を見せつけてくるね……泣きたい。

「ほら、お前もやつてみんな」

「はい」

筆を渡されて刀の前に座られたけど、どうしたらいいんだコレ。……、や、布氣づくんじやな、奄。

……いや、怖気づくんじやない俺。

俺は前世の夢を叶えるために転生したんだろうが。

それなのにこんな初步的な所で躊躇してどうする。

迷いを振り払うようだ、一氣

に下ろした。

ぐちやりと音を立てて潰れる筆先。

飛び散る漆の数々。

ついでに漆を浴びる俺（と親父）。

そして静まる小屋。

「ス、スミマセン……ちょっと力んじやつたみたい、です」

「そうみたいだべな、誰だつて初めては緊張するだ。気張つていいくべ」